

## 2023 年度 第 1 学期試験問題および解説 社会心理学

担当者: 横山智哉

### 試験問題と採点基準

以下に、第 1 学期試験問題とその問題の正解および採点基準を示す。実際の採点では各要素を説明できていない度合いに応じて点数を低くした。

#### 問 1

認知的不協和理論に基づき、人間の態度変化のメカニズムを説明しなさい。その際には、授業内で当該理論を説明する際に取り上げた例ではなく、自身が考えた具体例に基づき簡潔に説明すること。分量は 3 行程度を目安とする。(5 点)

##### 1. 態度変化のメカニズム (計 3 点)

- 人は情報や知識の一貫性を求める傾向がある [2 点]
- それらが一貫しない状況を不協和状態と呼び、そのような状態を解消するために自身の認知や態度を変化させる [1 点]

##### 2. 認知的不協和理論に関する具体例 (2 点)

- 具体例が態度変化のメカニズムを説明する上で適した例を記述できている

#### 問 2

人間がステレオタイプを保有する合理性と、その結果として生じうるネガティブな帰結をそれぞれ説明しなさい。分量は 5 行程度を目安とする。(10 点)

##### 1. ステレオタイプを保有する合理性 (計 6 点)

- 情報処理に伴う認知資源を節約できる効率性 [3 点]
- 判断対象に対する知識不足をカテゴリ知識で補うことが可能となる [3 点]

##### 2. ネガティブな帰結 (計 4 点)

- マイノリティ側の人にとって何らかの偏見を押し付けられる [3 点]
- 否定的なステレオタイプの自動的な活性化 [1 点]

### 問 3

以下の図は、授業内でも紹介したリンゲルマン効果を追試した実験結果（Ingham, Levinger, Graves & Peckham, 1974）である。そしてオリジナルの実験と同様に、Ingham et al.（1974）の追試実験もロープの牽引力を集団のサイズから説明するデザインを採用している。そこで、なぜ本実験は実際の集団と疑似集団を区別した実験デザインを採用したのか、この実験を実施することで何が明らかになったのかをそれぞれ詳細に説明しなさい。分量は8～10行程度を目安とする。（20点）

<Fig.2: Mean individual pull scores according to group size>

出典: Ingham, A. G., Levinger, G., Graves, J., & Peckham, V. (1974).  
The Ringelmann effect: Studies of group size and group performance.  
*Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 371–384.

1. 実際の集団と疑似集団を区別した実験デザインについて（計12点）
  - 動機的損失と調整損失の区別を目的とした実験デザイン
    - 動機的損失の定義: 集団で従事する作業へのやる気が低下すること [4点]
    - 調整損失の定義: 努力の同時性が損なわれること [4点]
  - 疑似集団の操作化とその目的
    - 疑似集団に調整損失が存在しない [4点]
2. 追試実験の結果の解釈（計8点）
  - 潜在的生産性と疑似集団の比較: 牽引力の減少率が動機づけ損失であり、この減少率が社会的な手助けを実証している [5点]
  - 疑似集団と実際の集団との比較: 牽引力の減少率が調整損失となる [3点]

### 問 4

以下の記事は、読売新聞に掲載されたものである。

<記事画像>

出典: 読売新聞 (2022).  
「台風で家水没」デマ画像 SNS で拡散. 読売新聞, 9月28日, 29.>

- (1) Aの段落では、流言がもたらす社会的混乱を防止する重要性が論じられている。そこで、まず流言の定義を説明した上で、流言の公式（Allport & Postman 1947）に基づき、流言の流布量を規定する要因をそれぞれ説明しなさい。その際には、本記

事のように自然災害を例とすること。分量は5行程度を目安とする。(10点)

1. 流言の定義 (計4点)

- 社会の広範囲に広がることで社会的な悪影響をもたらす [2点]
- ①情報を伝達する、②人によって真偽が異なる、③簡潔である、④一過性を伴う [各要素が1点、2点を上限として加点する]

2. 流言の流布量 (計5点)

- $R \sim i \times a$ : 重要性和曖昧さの積で流布量が規定される [4点]
- 重要性あるいは曖昧さのいずれかの要因が0であれば流布しない [1点]

3. 自然災害を踏まえた具体例 (1点)

(2) Bの段落では、「災害時は、情報を求める心理からデマが広がりやすい」とある。なぜ、災害時は情報を求める心理から流言が広がりやすいのか。その理由について、流言を集合行動とみなした上で、社会的リアリティの観点から詳細に説明しなさい。さらに流言の特徴についても、人々のコミュニケーションを通じた共同作業の観点からそれぞれ説明しなさい。分量は10～15行程度を目安とする。(25点)

1. 集合行動としての噂が生起する条件 (計18点)

- 非緊急事態では、社会的リアリティを活性化して状況の進展予測をする [5点]
- 緊急事態では、状況の再定義と再構成が必要となる [5点]
- 緊急事態を理解する際に、非緊急事態における状況の定義と予期しうる事象の期待に基づき、新たな状況の予測と解釈を行う [5点]
- そのようなズレは緊急事態の誤帰属から生じる [3点]

2. 共同作業としての流言の特徴 (計7点)

- 他者との共同作業: お互いが保有する知識を活用して、曖昧な状況の解釈を試みる共同作業としての対人コミュニケーション [5点]
- 流言の特徴が顕在化する条件: 問題状況を解決するニュースが入手できない、あるいはニュース欲求がニュースの供給量を上回る状況 [2点]

学期末試験の講評

各設問で問われていることに正しく答えていない記述が散見されました。たとえば、問1で「認知的不協和理論に基づき、人間の態度変化のメカニズムを説明しなさい」とあります。心理学では態度変化を説明する理論は多く存在しますが、本設問の場合、認知的不協和理論に基づき説明しなければ加点できません。今後は、設問文で何を問われているのかを考えて回答できれば、より高い点数が期待できると思います。

最終的な成績評価を行う際には、全ての回答者の点数を考慮した上で点数調整（点数加算）を行いました。その際には、ある一定の範囲の中で 1 点ずつ加点の値を増やし、C 評価と F 評価の割合が最も減る値（つまり、単位を取得できない人の割合が最も減る値）を採用しました。

#### 追試験問題の問題

追試験の受験者は 2 名であり、以下に追試験問題と講評を示す。

#### 追試験の問題

第 11 回目から第 13 回目の講義では、「議題設定機能」および「フレーミング効果」というメディア効果論において主要なモデルを扱った。ただし、いずれの理論も当時の主要なメディアである新聞やテレビを対象として提唱されている。

そこで、現代のメディア環境の特徴に基づき、上記の 2 つの理論では説明できない具体的な出来事や現象を取り上げなさい。次に、なぜそれらの理論では説明できないのかという原因を論じなさい。最後に、その原因に対処するためには新たにどのような要因に着目すべきかを論証することで、「議題設定機能」および「フレーミング効果」が抱える問題を改善したあなたなりのモデルを提示しなさい。

#### 追試験の講評

本授業で扱った議題設定機能およびフレーミング効果を正しく説明をした上で、設問で尋ねられている点について説明できていない記述が多く見られました。

#### 改訂履歴

第 1 版 2022 年 9 月 23 日

以上